

歳時 世相篇

④ 【雨安居】

ラオスの若者が出家する理由

平井 京之介（ひらい きよすけ）

本館民族文化研究部

ラオスなどの東南アジア大陸部では、六月から一〇月が雨季である。海から大陸に向かつて湿潤な南西の季節風が吹き、毎日雨を降らせる。

日本で梅雨が好きな人は少ないだろうが、ラオスの雨季はけっこう人気がある。多くの人があげる理由はふたつ。まず、食料が豊富なこと。農村で暮らしていると、雨季にはいろいろな味が楽しめる。山でタケノコ、キノコ、野菜が採れ、川や沼でサカナやエビ、カエルが獲れる。腕さえあれば、またイネの生育にも雨季の降り続く雨は不可欠だ。この地域の主食はコメなのだから。

かが涼しいこと。ラオスでは、三月終わりから五月にかけてがもつとも暑い。昼は四〇度近く、夜でも三〇度前後ある。一日中、鼻の奥に何かがつまっている感じで、息苦しい。頭はまったく動かない。扇風機は熱風をかき回すだけで、夜眠れない。一気にクールダウンしてくれる雨が待ち遠しい。

雨季のあいだ、上座部仏教の僧侶は僧院にこもって修行する。本来、出家者とは諸国を遍歴して修行する者。托鉢して布施を受け、ボロ切れをまとい、樹下で眠り、簡素な生活を送る。しかし雨季の遊行は不便である。疫病にかかりやすい。布施を受けるのが困難。草木の若芽や虫

を踏んでしまう。あるいは、百姓が植えたイネを踏んでしまう。ブツダは修行僧に雨季の定住を勧めた、と『大パリニツバーナ経』にある。これが雨安居（あまじ）（バンサー）だ。

一生に一度は出家せよ

現在、雨安居とは、曆のうえで雨季にあたるラオスの陰暦八月一六日から十一月五日（二〇〇八年は太陽暦で七月一八日から一〇月一四日）のことを指す。僧侶が三カ月間集団生活しながら修行に専念する大切な時期だ。雨安居を何回経験したかが、僧侶として

の経歴年数とされ、これによって教団内の地位が決められる。ちなみに明確な雨季のない日本でも、禅宗には雨安居の習慣があるそうだ。

上座部仏教を信仰する社会には、男子たるもの一生に一度、家を出て、解脱を求めて修行せよ、という教えがある。出家経験が社会的な信頼をえることにつながる。これがないと未熟者だ。女性にもてたければ、出家しろ。責任感や道徳心、礼儀作法などが身につく。かつて僧院は唯一の教育機関であり、読み書きをはじめ、知識を学ぶ場でもあった。

出家は本人の信心しだいでもいつしてもよい。飽きたらいつでも還俗できる。

しかしもつとも一般的な出家期間は三カ月、時期はこの雨安居である。結果、毎年雨安居になると、ラオスの僧院ではどこも人口が二、三倍にふくらんでいる。

修行で何を学ぶのか

それでは僧院にこもって何をするか。特別な修行や断食などするわけではない。ふつうに暮らすだけ。三時半に起きて朝の読経をし、夜が明けたら近くの村まで托鉢に行く。日に一度の食事を済ませ、掃除や菜園の手入れ、僧坊の建設などの雑役をする。水浴びの後、午後四時から夕方の読経に出る。これが一日のおもな日課だ。あとは空いた時間を利用して、経を覚えたり瞑想したり。

月に一回、僧侶全員が参加して、布薩（フボースタ）儀礼が開かれる。シーマとよばれる神聖な場所をもつ本堂に集まり、過去一カ月分の自分の行動を反省し、犯した罪を懺悔する。それから、あらためて僧侶の守るべきパーティモツカ（二七条の戒律）の全文が読み上げられるのを聴き、各自誓いをあらたにする。

こうした修行を経て何を学ぶか。仏教の教え。人生について。自分について。答え方はいろいろあるが、具体的に説

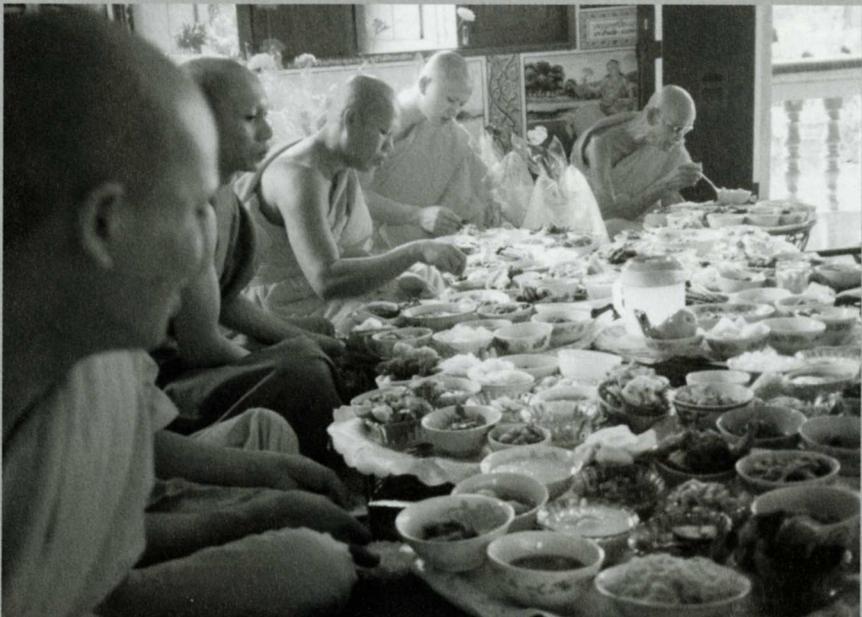
明するのはむずかしい。仏教の教えとは、テキストを覚えれば済むようなものではない。各人が瞑想するなかで自ら悟るほかないのである。

わたしが学んだことを少しだけ紹介しよう。まず、集中力の大切さ。一所懸命食べたり、歩いたりすることがいかに大事か。これが生きるということだ。もうひとつは煩惱について。過去の苦しかった経験をひとつひとつ取り上げ、経典や説法を導き手としながら、何が原因かをとことんまで考え抜く。すると、おほるげながらつかめてくる。苦しみの原因はいつも自分にあるということが。

出家の新しい意味

現在、ラオスの農村では、雨安居にあわせて出家する若者がぐっと減ってしまった。教育機関としての機能が学校に取って代わられたためだ。学歴が僧侶より高く評価されるようになった。元僧より大卒の方が女性にもてる。

皮肉なことに、都市では若い出家者が増えている。地方の貧困地域から多数の少年が都市にやって来て、僧坊に起居しながら高校や大学へ通うのである。出家が、ただで高等教育を受ける手段になっているのだ。



入雨安居の儀礼に参加する僧侶